

地域の子どもの学習格差をなくす「美術と学び」支援事業



特定非営利活動法人
山王学舎
 sanno-gakusha

2018年 事業報告

特定非営利活動法人 山王学舎 地域の子どもの学習格差をなくす「美術と学び」支援事業

福岡市NPO活動推進補助金を活用し、2018年度より特定非営利活動法人山王学舎は、地域の子どもの学習格差をなくす「美術と学び」支援事業を取り組みました。

山王学舎がある福岡市博多区地域の課題は、障がいを抱えた子ども、外国籍の子ども達が学校以外の公的な養護養育の仕組みに漏れ出している現状があります。ひとり親や共働き世帯、多子世帯の経済的な問題をもつ家庭や、一般家庭の子どもにも放課後の更なる支援が必要で、みんなが集まる事が出来る居場所への要望は非常に大きいものでした。学校と家庭とは違う、地域で子ども達を見守る「第3の居場所」作りと地域の家庭間のネットワーク作りは急務と考えました。

私達のこれまで美術造形教育で培ってきた手を動かす絵画制作や工作などを通じて、非言語の分野を弾力的に活用し、様々な課題を抱えた家庭の子どもの学習支援、地域の課題として解決を目指しました。またそのような場を設けることで保護者も集う地域の交流拠点として立ち上げました。

今回の支援事業は大きく分けて6つの事業を複層的に行い、単なる子どもの学習支援に留まらず、地域の子育てや交流の拠点を確立する事を目標としました。

事業実施期間

2018年8月6日(月)～2019年3月31日(日)

事業実施場所

福岡市博多区博多駅南6丁目5-2 山王学舎

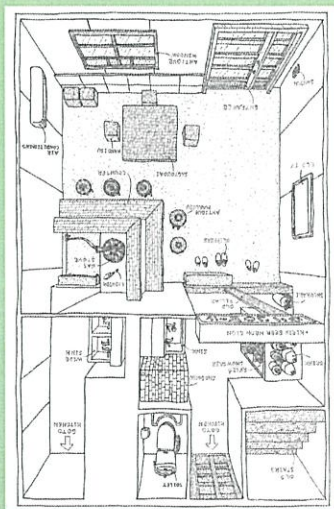
事業対象者

地域の様々な課題を抱えた、小学生・中学生及び保護者

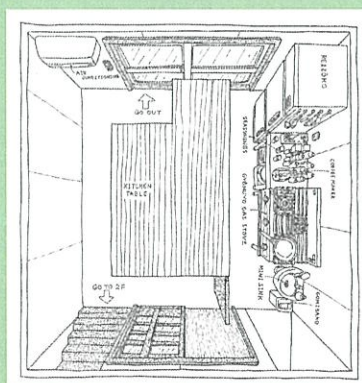
山王学舎事業所外観



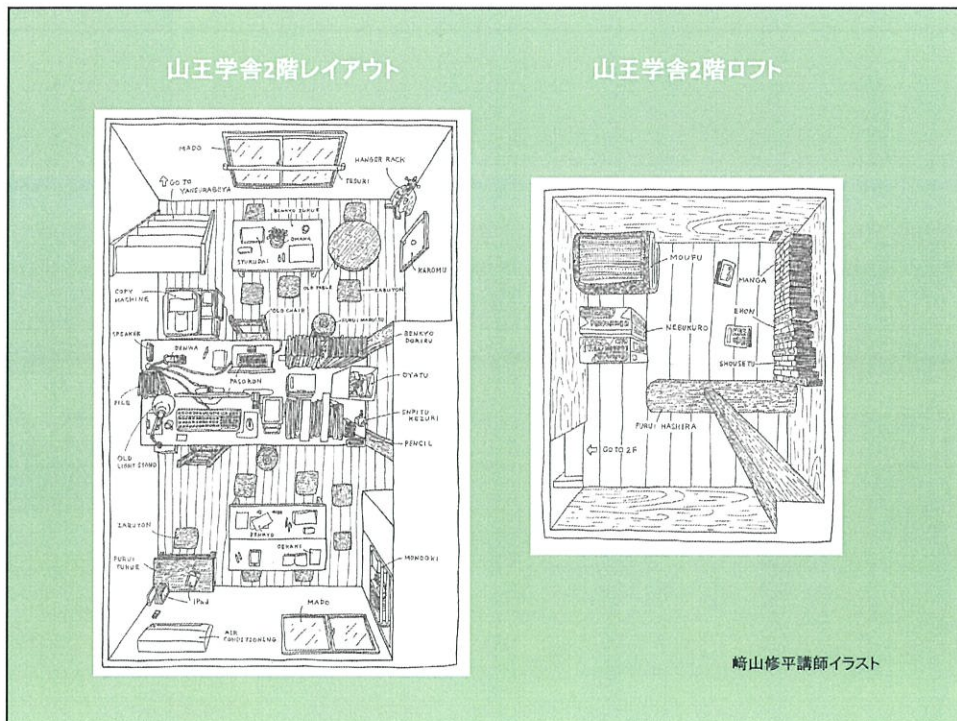
山王学舎1階レイアウト



山王学舎1階奥レイアウト



崎山修平講師イラスト



私達山王学舎の取り組み 本事業では下記の6つの事業を複層的に行いました。

① 子ども達の異年齢・文化交流コミュニケーションとしての美術・造形活動

様々な年齢の子ども達が等しく価値を認め合う美術を通じた時間を設け、子ども達同士のコミュニケーションを豊かにを行い、参加している子ども達の創造性を育む活動

② 子どもの自学・学習習慣化支援活動(小学校低学年・高学年・中学生)

普段一人で過ごすことが多い子ども達に学習スタッフが一緒に伴走し、宿題や自学を習慣づけて行く。自ら学ぶ力を身につけ自発的な学習機会を創出する活動

③ eラーニングによる次世代学習の取り組み(中・小高学年)

自学の習慣化が図れるようになった子どもにはeラーニングを使った学びを行いました。タブレットを使用することで、学校の学びと違う興味を引き出し、学習時間を意欲的に捉える自習サポート活動。

④ 参加している子ども達の支援における効果測定(定期的な学びの測定)

市販されている教科ドリル、そして寄贈いただいたZ会の教材を用いて各学年の学びの習熟度・学習効果の測定。自学学習に参加している子ども達自身に学びの効果や力がついていることを自覚してもらい、継続性の大切さや学習の客観的評価の確立を図る活動。

⑤ 参加している家庭のサロン・意見交換会の開催

学習に参加している子ども達の家庭の方々にも取り組みを共有してもらう為、子ども達の孤食を防ぐ活動「山王学舎子ども食堂」開催時に、保護者の方々を交えて意見交換会を開催。

⑥ 日本語支援教員や大学講師による支援向上研修の開催

山王学舎が立地している地域で早くから子どもへの学び舎や支援を広げているお寺の住職をお呼びして、現場での支援や事例を紹介・講演頂き、山王学舎に集まっているスタッフ・保護者の子ども支援に対する意識改革や学びの一助とした取り組み。

① 子ども達の異年齢・文化交流コミュニケーションとしての美術・造形活動 週2回

様々な年齢の子ども達が等しく価値を認め合う美術を通じた時間を設け、子ども達同士のコミュニケーションを豊かにし、参加している子ども達の創造性を育む活動を行いました。自学がちょっと苦手な子どもも、造形遊びや絵具を使っての制作は、張り切って取り組んでくれました。授業の中で年齢が違うお友達をサポートしてくれる姿が印象的でした。



子どもの自学・学習習慣化支援活動(小学校低学年・高学年・中学生) 週7日開催

普段一人で過ごすことが多い子ども達に学習スタッフが一緒に伴走し、宿題や自学を習慣づけて行く。自ら学ぶ力を身につけ、自発的な学習機会を創出する活動です。本事業の中で核となる事業です。



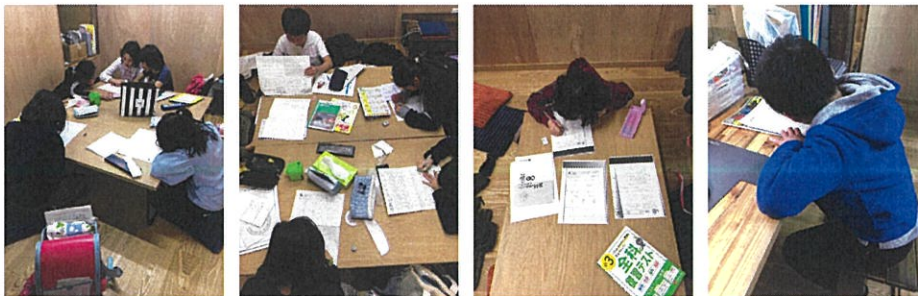
③ eラーニングによる次世代学習の取り組み(中・小高学年) 週7日開催

自学の習慣化が図れるようになった子どもにはeラーニングを使った学びを行いました。タブレットを使用することで、学校の学びと違う興味を引き出し、学習時間を意欲的に捉える自習サポート活動。子ども達はインターメディアとの親和性も高く、今後大きく伸びる活動と考えています。



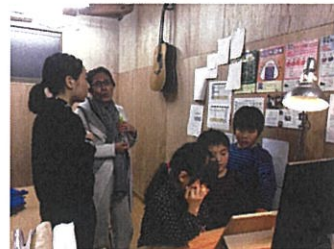
④ 参加している子どもの支援における効果測定(定期的な学びの測定) 2回開催

市販されている教科ドリル、そして寄贈いただいた2会の教材を用いて各学年の学びの習熟度・学習効果の測定。自学学習に参加している子ども達自身に学びの効果や力がついていることを自覚してもらい、継続性の大切さや学習の客観的評価の確立を図る活動を行いました。全員がある程度学舎にある教材に慣れてきたこと、参加者が多い、金曜日・日曜日に開催しました。



⑤ 参加している家庭のサロン・意見交換会の開催 合計6回開催

学習に参加している子どもの方々の家庭の方々にも取り組みを共有してもらう為、子ども達の孤食を防ぐ活動「山王学舎子ども食堂」開催時に、保護者の方々を交えて意見交換会を開催。地域の子育ての相談や、学校内外での子どもたちの様子、普段聞けない地域の情報交換の場として効果がありました。



⑥ 日本語支援教員や大学講師による支援向上研修の開催 計4回開催



11月18日(日) 日本語支援員 田中木美先生
福岡市内の多文化の子ども達の現状について、日本語支援員の関りからお話し頂きました。



1月20日(日) パルキッズぐるめ 張友樹先生
久留米大学学生ボランティアと久留米市内の学童の取り組みについてお話し頂きました。



2月17日(日) 九州産業大学 富永剛先生
美術造形を通じた幼児教育、イタリアの「レージョ・エミリア」の活動を中心に、非言語領域の学びとサポートについてお話し頂きました。



3月17日(日) 光薫寺 小林信翠先生
山王学舎が立地している地域の古来からの子どもへの取り組みと、お寺を通じたSDGsの取り組みについてお話し頂きました。

事業を通して解決した(改善に向かった)課題, 対象者に見られた変化等

子ども達＝受益者自身への効果「学校外での学びの機会の増加」

○事業開始月の9月には認知度も高くなく、参加者の登録は8名→事業最終月の2019年3月には登録者数も27名約300%の増加

○2019年3月には自学の参加者も月間116名まで増加し、継続的な学びの形が出来つつあります

○異年齢の子どもたちが一緒に学ぶことで教えあったり、サポートしたりする風景も見られた

○経済的に厳しい家庭の場合、学習ツールもドリルや参考書に頼りがちだが、eラーニングを取り入れ、ウェブへの扱いや参加者の自学学習意欲を高めた取り組みとして成功

子どもを育む地域への波及効果

「地域の持つ子どもを中心とした地縁・地域の力再構築」

○地域で孤立しがちだった様々な背景を持つ子ども達が意欲的に学習会に参加し、学力やコミュニケーションの向上を図ることが出来始めた

○子どもの放課後の居場所・学外支援の場所を探している保護者・先生・本人が、山王学舎の機能や取り組みを理解し、地域の拠点として力を発揮し始めた

保護者や子ども達の声は...

○学校には通えていない(不登校)が、山王学舎の「美術と学び」支援事業には通えている分、外との接点が出来て安心している(春住小に通わせている保護者)

○地域校区の留守家庭では良い環境や関係が築けなかった子どもが、山王学舎の「美術と学び」支援事業に参加することは、楽しく継続出来ている。(春住小)

○学校に通うことが出来ていない(障がいを抱えているお子様)参加者がいるが、中学校の先生は、「本人が山王学舎に通えているようですので、山王学舎で面談しましょう」と、山王学舎を学校と家庭の学外連携として使って頂いている。(東住吉中)

○SSW(スクールソーシャルワーカー)の先生も見学に来て頂き、取り組みを理解したうえで、今後担当している外国籍(フィリピン)子どもを紹介したいと考えている。(東住吉小・東住吉中)

○学校に通うことが出来ていない子どもが、山王学舎に来ていると聞いて、見学に来ました。山王学舎が民間のサポートとして、当該学生の出席日数に充当出来ないか教育委員会に確認してみます。(某中学校校長先生:現在進行中なので伏せさせていただきます)

地域で孤立しがちだった様々な背景を持つ子ども達が意欲的に学習会に参加し、また学力やコミュニケーションの向上を図ることが出来始めています。それ以上に、子どもの放課後の居場所・学外支援の場所を探している保護者・先生・本人が、山王学舎の機能や取り組みを理解し、地域の拠点として力を発揮し始めています。

事業取り組みの今後の課題

○子どもたちにとって、学びと同じくらいに「遊び」も重要だった。学びだけを押し付けてなかったか。もっと子どもが時間を気にせず取り組めるカリキュラムと「あそび(時間的な)」が必要。

○今回行う事業は、1年で即効的な効果が得られるものではなく、複数年継続的に行う事によってはじめて地域の認知度や参加している子ども達の成長の効果が得られるものと考えています。補助事業が終了しても、団体の必須事業として本事業は、継続して行わなければいけない。

○補助事業終了後の事業財源の確保。寄附活動と収益活動が見込みより集まらなかったとしても、必ず事業規模を再検討しながら継続的活動を行う。

○翌年の補助事業を応募するにあたって、既に参加している参加者の学びを止めないためにも、2019年4月以降もこれまでの時間と日程にて「美術と学び」の授業を開催。その後、2019年NPO活動推進補助金の活用も視野に入れ、本事業を運営。

○福岡市博多区だけの課題解決のみならず、福岡市の他地域への子ども育成にもつなげていく。今後は、当団体だけが行うことが出来るノウハウだけで運営するのではなく、他団体との連携や、行政の子ども健全育成事業への提言化等を行います。(団体独自の実績報告書を作成)

○本事業を行った中で検討材料があるとなれば、より多くの地域の方やノウハウを持った講師を関わっていただくため、報酬面を再考。報酬面でシフトを作成することが難しいときもあり、放課後の時間を先生方も本事業に割くことは、移動時間や準備・片付けを含めると要検討といえました。

ご清聴ありがとうございました